

あった。また、良性悪性境界病変である class III に関しての悪性検出率についても LBC 法が従来法よりも高い値を示した。

LBC 法で不適正標本が減少したことは、標本精度の向上や採取細胞数の増加により、標本作製時の術者手技や経験年数による影響が少なくなったことが反映されたと考えられる。

今回報告した症例をはじめ、臨床的に良性腫瘍と診断し細胞診で良性悪性境界病変と判定されたものから悪性腫瘍を検出した症例も認められた。細胞診はスクリーニング検査であり、判定結果や臨床所見等を総合的に判断することが重要であると考える。

23) 本学学生における講義出席率の向上に対する出席評価の有効性

○南波 春佳, 松本 知生, 池田 敏和, 金子 良平
内山 梨夏, 安樂 英莉, 山森 徹雄
(奥羽大・歯・歯科補綴)

【緒言】当講座では第4学年前期において有床義歯補綴学Ⅱを担当している。部分床義歯による補綴歯科治療の一連の診療過程について説明するため、講義の欠席はその診療過程に対する知識の欠落、ひいては診療全体の理解不足に結びつくと考えられることから、学生の欠席を抑制することを目的として、総括的評価の一部に出席状況を取り入れている。出席状況や成績について解析したところ興味ある知見が得られたため発表する。

【対象と方法】解析Ⅰでは、2015年～2019年の第4学年前期講義科目の10科目を対象として、科目ごとに一時間あたりの欠席者率を算出した。科目ごとの欠席者のべ人数を講義時間数と学年の学生数の積で除し、%表示とした。

解析1-1)として、まず、欠席者率の5年間の推移について、全科目の平均と、有床義歯補綴学Ⅱの値を算出した。

解析1-2)として、科目ごとの5年間の平均欠席者率を算出し、比較・検討した。

解析Ⅱとして、2019年度の有床義歯補綴学Ⅱ前期試験成績を欠席回数別にグループ化し、グループごとの試験成績を算出した。

【結果】調査期間を通じて全科目の平均欠席者

率よりも、有床義歯補綴学Ⅱの平均欠席者率は低い値であり、調査対象の10科目の中で有床義歯補綴学Ⅱは2番目に欠席者率が低かった。

また、欠席数が少ない学生の方が前期試験の成績が良い傾向にあった。

【考察】出席評価をすることにより出席率および成績の向上が見込まれることから、出席評価は本学学生のレベルアップを図るうえで有用な方法の一つと考えられた。

24) 奥羽大学歯学部生の読解力測定と読解力向上のための試み位

○伊東 博司¹, 菊地 尚志², 宇佐美晶信³, 遊佐 淳子¹
櫻井 裕子¹, 本多 真史⁴, 芹川 雅光³
(奥羽大・歯・口腔病態解析制御・口腔病理学¹,
奥羽大・歯・教養・物理学²,
奥羽大・歯・生体構造・口腔解剖学³,
奥羽大・歯・教養・日本語学発表者⁴)

2018年5月に行われた奥羽大学歯学部FDワークショップにて奥羽大学6年生の読解力の低さが指摘されたことから、奥羽大学歯学部学生の読解力を測定して、その結果と奥羽大学歯学部教育科目点数との関連を検討し、さらに、読解力に問題ありとされた学生に読解力向上のための演習を実施した。

読解力測定のために、教育のための科学研究所が主催するリーディングスキルテスト(RST)を18年度歯学部1～3年生に受験させた。RSTの評価6項目それぞれの点数と、歯学部教育科目6科目の点数との相関関係をみた。また、RSTの評価で「高度の資格を取得する上で、大きな障害になる可能性があります」というコメントが付された19年度2年生と19年度2年編入生に、科目選択ゼミナールの時間で、読解力向上演習を受講させた。この演習の初回と最終回で、同一の問題を演習受講生に受験させ、2回の試験の点数を比較し、演習の効果を評価した。

RSTのすべての評価項目点数は歯学部1年生の教育科目である日本語リテラシーの点数と相関があった($r=0.42\sim 0.58$)。しかし、強い相関($r=0.7\sim 0.9$)はいずれの歯学部教育科目との間にもまったく見られなかった。RST評価点と歯学部教育